

「医不仁之術、欲務為仁（医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す）」。医療は無条件に善なものではなく、悪にもなる。だからこそ医者は謙虚に社会に尽くさなければならぬ▼これは中津医学校（1871年設立）の初代校長をした外科医大江雲沢が強く掲げた医訓だ。中津市の大江医家史料館（2004年に大江家旧邸を改装）で顕彰されている雲沢は薬草マンタラゲを使った麻酔薬の発明者、華岡青洲の大坂分塾で学んでいる▼中津の蘭学・医療史を研究する川島真人氏（整形外科医）が雲沢の薬箱から大量の漢方薬を発見。史料館開館時につくったのが「マンタラゲの会」だ。史料館の裏庭に薬草園を整備し、春に約30種類の薬草を植え、秋に収穫して薬草風呂を体験する。今年の秋の会には小欄も参加して園を手入れし、神戸輝夫氏（立命館アジア太平洋大学孔子学院院长）の講演「三浦梅園と中津」も拝聴した▼青洲は約20年をかけ、母親や妻の体で実験を繰り返した。毒と薬効、つまりマンタラゲの「もろ刃の剣」を身をもって示した教えが冒頭の医訓につながっている、と見ているのが川島氏だ。その川島氏も40年に及ぶ研究で国際潜水・高気圧環境医学会の2012年度国際潜水医学学術賞を受賞した▼ノーベルのダイナマイトしかり、山中伸弥氏のiPS細胞しかりで、努力と時には多大な犠牲で得たのが発明だ。そしてこの成果を善とするか、悪とするかは社会次第である。雲沢らの教えを、あらためてかみしめたいものである。